

氏名	堀 由紀江
ヨミガナ	ホリ ユキエ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第651号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 メタエッセイ Metaessays 〈作品〉 コスモヘリウム Cosmohelium 「隠されたモニュメント」 「エッセイ映画」 [メタエッセイ・サンプル] 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術研究科)	小山 穂太郎
(論文第1副査)	横浜国立大学	准教授	(大学院都市イノベーション研究科)	平倉 圭
(作品第1副査)	多摩美術大学	教授	(情報デザイン学科)	港 千尋
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術研究科)	三井田 盛一郎
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術研究科)	ミヒャエル シュナイダー
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

「メタエッセイ」は一つの語る存在により書かれたエッセイ集である。

思いがけず堀由紀江のマテリアルを入れたひとつの包みを受け取り、そして日系ブラジル人アーティスト、ユキエの創造的宇宙について反省的な旅に出た、そのような語り手である。

テキストでは回り道、障害、近道などを経ながら、ユキエのアート実践の概念、手法、バックグラウンドとなるものを、作品と鑑賞者との結びつきやその相互作用がどのようにして時間・空間、社会的関係に影響されるかを見過ごすことなく、指摘し、理解し、分節することを試みている。

作品とキーワードがこのエッセイ集の道筋を示す。しかしながら、こうした事前に行く先を決めることのない旅や散策につきものであるように、2020年に経験されたパンデミックや書くこと自体についての考察。

この本の意図は、観察する者とされる者、現在と過去との対話を確立しながら、エッセイの形式と共に、フィクションとドキュメンタリー、内なる世界と外なる世界、思考と表現、理論と実践、書くことと読むこと、そして言葉とイメージとの浸透性のある関係を実践に移すことにある。

このように、この本は一つの芸術作品として作られた。その中でアーティストとエッセイストの仕事は、エッセイ形式は視覚芸術へと延長可能な一つの方法であるという認識のもと絡まり合っている。

metaessays gathers texts written by a narrating entity who, after inadvertently receiving a

package with Yukie Hori's materials, embarks on a reflective journey about the Brazilian-Japanese artist's creative universe.

Through detours, mishaps, and shortcuts, the texts aim at indicating, understanding, and articulating concepts, procedures, and references in Yukie's artistic practice without losing sight of the bond between artwork and audience and how that interaction is affected by time, space, and social relations.

The works and keywords guide the paths of this literary miscellanea. However, as a journey that refuses a pre-assigned destination, other trails are experienced, such as the pandemic experienced in 2020 and consideration about the writing itself.

By establishing a dialogue between observer and observed, present and past, this book intends to put into practice the essay form and its porous relationships between fictional and documental, inner world and outer reality, thought and expression, theory and practice and – between writing and reading –, words and images.

Therefore, this book is developed as a work of art in which the crafts of the artist and the essayist are intertwined by the notion that the essay form is a method extendable to the Visual Arts.

(論文審査結果の要旨)

『メタエッセイ』と題された堀由紀江氏の博士論文は、堀氏がこれまで制作した作品群とそれに伴う思考を、自身の分身から送られてきたマテリアル群という半虚構的な枠組みのもとに、断章的なエッセイの形式で束ねたものである。断章は次のように題されている。「招待状」「包み」「形式」「ヒント」「鏡」「献辞」「迷宮」「心臓」「対話」。

本論文はまずポルトガル語で書かれ、その後英語と日本語に訳されている。3つの言語からなるエッセイ群は、コロナ禍の日本で暮らす現在の堀自身について、ブラジルでの過去の作品制作とその方法について、熱狂と圧政、混乱と秩序が絡み合うブラジルの近現代史について語り、一種の反省的自叙伝のかたちをとる。その自叙伝で探索されるのはしかし、堀氏のアイデンティティ（自己同一性）ではない。むしろ同一性の動揺と変容である。

鍵概念は「錯乱」である。ポール・ヴァレリーの『テスト氏』から見いだされた「錯乱」という語が、エリオ・オイチシカ、ジルベルト・ジル、カエターノ・ヴェローゾらが展開した1960年代ブラジルの革命的な芸術=生活運動トロピカリアの「錯乱」と結び付けられ、また現代美術におけるアプロプリエーションや日本の和歌における本歌取りの「錯乱」、日本酒が引き起こす「錯乱」やウルグアイの著述家エドゥアルド・ガレアノが訴える「錯乱」的な未来のヴィジョンと結び付けられる。そのように多数の固有名と異なる土地を通過しながら、自分と自分ではないものを混ぜ合わせ、自分が何者であるかを不確定化し、同一性の外で語り作ることが堀氏の錯乱的方法である。その方法はエッセイ群を通して、「献辞」「ドローイング」「借用」「ペルソナ」といった概念を通して、繰り返し、少しずつかたちを変えながら語り直されていく。それは絶えず自身を、外へと開かれた通路のようなものに変えようとするアーティストの制作原理の表明であるとともに、読む者自身をこの「錯乱」的な通路の体験へと巻き込む装置としても機能している。

この意味において本論文は、独立した作品としても理解しうるものであり、内容と形式の両面において一貫した高度な探求を実現している。以上により本稿は、博士論文にふさわしい達成があると評価できる。

(作品審査結果の要旨)

堀由紀江が発表した作品は、コンテンポラリーアートの特徴を備え、かつ2020年に制作されることで、わたしたちの社会が必要としている想像力の在り処を示す力を持っていると評価できる。その理由をいくつか述べてみたい。

まず日本とブラジルというふたつのアイデンティティを同時に意識しながら制作を続ける過程で、堀はブラジルの現代アートに大きな影響を与えたヘリオ・オイチシカのアートと出会う。オイチシカの実験精神を受け継ぐように、彼の「ペネトラヴェル」を変奏＝応用したヴァージョンを作りながら、そのインスタレーションを映像化し、さらにそれを展覧会場で上映する。アプロプリエーションの技法とも言えるが、ここで重要なのは、ともすれば二項対立的になってしまうアイデンティティの模索に対し、「ペネトラヴェル」が第三項として機能することによって、プロジェクト全体に自由度を与えている点ではないかと思う。

ユニークなのは映像とテキストの扱いで、「エッセイ映画」と題されたインタラクティブ作品である。論文でも堀は、エッセイという形式を拡張する試みを行ったが、作品ではヨコ書きとタテ書きのデザインが面白く、しかも非接触式のセンサー・コントローラーによって、左右にスクロールする仕組みとなっている。それは新型コロナウイルスによって、多くの展覧会が中止や延期となるなかで、感染を抑えながら鑑賞するための工夫であるが、こうした工夫そのものが、2020年の世界の現状を作品が取り込んでいるとも言えるだろう。

こうした構造を含んだ全体が「コスモヘリウム」であるが、この造語が暗示するのは異なる要素を変換しながら、そこに一定の秩序（コスモス）を作り出す装置ではないだろうか。だがそれは、世界美術館や世界図書館を内包する（ル・コルビュジェが描こうとしたような）「ムンダネウム」とは異なり、本質的にノマディックであり、どのような条件にも適応しながら、現代社会の隙間に色鮮やかでリズムカルな「自由区」を作り出す、軽快さを持っている。堀由紀江の作品は、パンデミックで国境や都市が封鎖され、社会の分断が深刻化する今日、アーティストが作品を通して変換や交換の知恵を発揮し、対話を促す力を持っていると高く評価したい。

(総合審査結果の要旨)

堀由紀江は、ブラジル国籍の留学生として博士後期課程に在籍し、博士論文と研究作品を発表する。堀の両親は、60～70年代に日本からの移民船でブラジルへ渡り、そこで出逢い結婚している。特に父親は最後の移民船「にっぽん丸」に乗船し1973年に工場移住者として渡ったのである。堀由紀江の生まれた1973年、ブラジルは軍事独裁政権の真只中であつたという。

堀は自身の立場を「亡命者」という表現で考察している。ネイティブに用いる言語はポルトガル語である、日本語での会話は不便しないが英語の方が使える。堀は「地理的国境を越える時、亡命者は全世界を異国の地と見なし、思考の壁を打ち砕く。」と述べ、文化・環境・国という条件を同時に2つは持ち合わせ、その複眼的視点が平行次元の認識と対位法的関係の認識を生み出して活性化させていくことが見いだせると、その特異な立場から由に自身があることを意識している。

トロピカリア（トロピカリズム、または、トロピカルムーブメント）はブラジルで1960年代後半に起きた音楽を中心に現代美術、演劇、映画等、各種カウンターカルチャーが連動して広がった芸術運動である。エリオ・オイチシカはこの運動の主要人物であつた。当時のブラジルでの軍事独裁政権の抑圧に対して政治的な傾倒を強めたという、環境を作り鑑賞者が参加する体験するというエネルギーな活動を行なった現代美術家である。

堀はこのオイチシカの活動に共感し、方法を引用し現在の場所と映像作品の中、そのロケーションの場所で展開して見せている。映像の中で、東京の調布から上野に至る中で、オイチシカの作品「ペネトラヴ

エル」に焦点を当て、更に「パランゴレ」の展開を辿っている、モニュメンタルな作品の要素が、その場所や環境から解き放たれ衣類のように人の身体とともに移動する色彩や形態として躍動的な変貌を起こすのである。研究作品は大学美術館の窓のあるスペースに設置され、外からもそのメッセージを見ることができる。作品タイトルはコスモヘリウム「隠されたモニュメント」、同「エッセイ映画」、同「メタエッセイ・サンプル」である。身体を包み込むかのような場に配されていて、メタエッセイもモニター上にて非接触型の操作で全てを読むことができる。

堀の博士論文「メタエッセイ」は、10編のエッセイからなる、どこから読むも読者の自由であるが、堀自身、この意図を「観察する者とされる者、現在と過去との対話を確立しながら、エッセイの形式と共に、フィクションとドキュメンタリー、内なる世界と外なる世界、思考と表現、理論と実践、書くことと読むこと、そして言葉とイメージとの浸透性のある関係を実践に移すことにある」と明快に述べている。『対話』においては、ブラジル在住のアーティストのイネスとブラジルと日本という地球の反対側に住む者同士の間で日々写真を日記のように、または日々随想のように撮り続け、それを並べて再構成していく作業がなされている、これもまた、エッセイの範疇であり、そこから新たな広がりを探る試みでもある。

2019年のブラジルの大統領選挙では極右勢力の躍進の中で、堀はブラジル首都のブラジリアで取材して映像作品を作っている。「嵐の兆し(Antes da Tempestade)」は非常に人工的、厳格な都市の象徴たるモニュメントの数々を不穏な天候の下でとらえた写真・映像作品である。重い陰うつな作品の雰囲気は、40年前の軍事独裁政権誕生の不安の再来であろうか。極右勢力の現大統領の政策はアマゾンの熱帯雨林の生態系の崩壊を助長し環境問題に向き合い改善を図る世界とは逆行する。過去の軍事独裁政権も格差を助長させ、ファベラと呼ばれる貧困地域の拡大に対応できずにきている、さらに2020年のコロナ禍では、その貧困地域がコロナ感染を防ぎようもなく感染者が増えて医療が追いつかない状況であった。人種・民族の問題と経済格差、地球環境破壊という問題に加えて新たな感染症のパンデミックが国境を越えて迫ってきている中、まさにその予感を孕んでいる作品である。

エッセイは、確実な論拠や論考のつながりや構築の中で表現されることではなく、さまざまな位相の場において新たなリンクが発見される、別の道筋が示されるような緩やかな思惟や想念の場を提示する。

堀由紀江の博士論文と研究作品は、2020年というこのタイミングに即応して出てきているが、その背景は、1960年代後半からの世界の状況とも繋がったものであると云える。エッセイという実験的な取り組みを行い確かな内容を提示している。審査員全員の高い評価を得て、博士学位に相応しいものとして認めるものである。